〔續山之井夏〕根合　　江戸成瀬氏　重政

根合やいはゞこと葉の花ゑやうぶ

〔古今著聞集五和歌〕東三條院（一條母藤原詮子）皇太后宮と申ける時、七月七日撫子あはせさせ給けり、少輔内侍、少將のおもと左右の頭にて、あまたの女房をわかたれけり、うすもの、ふたあゐがさねのかざみきたるわらは四人、なでしこのすはまかきて、御前にまいれり、其風流さまゞになん侍ける、なでしこに付たりける、

なでしこのけふは心をかよはしていかにかすらんひこぼしの空

時のまにかすと思へど七夕にかつおしまる、なでしこのはな

すはまにたちたるつるに付ける

數ゑらぬ眞砂をふめるあしたづはよはひをきみにゆづるとぞみる

瑠璃のつぼに花さしたる臺に、あしでにてぬひ侍ける、

たなばたやわきてそむらんなでしこのはなのこなたは色のまされる

むしをはなちて

松虫のゑきりにこゑの聞ゆるは千世をかさぬるこ、ろなりけり

右のなでしこのませにはひかゝりたる、いもづるのはにかきつけ侍る、

萬代に見るともあかぬ色なれやわがまがきなるなでしこの花

すはまのこ、ろばに、みづてにて、

とこなつのはなもみぎはに咲ぬれば秋までいろはふかく見へけり

久しくもにほふべきかな秋なれど猶とこなつの花といひつ、

七夕まつりゑたりけるかたあり、すはまのさきにみづてにて、

墨麥合